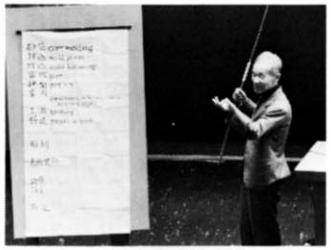
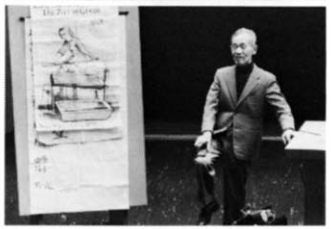
ガラス展を終えて

美しさともろさを同時に備えたガラスの展覧会は秋の人々の心にある種の共感を呼び起したようです。——ガラス工芸研究会の全面的な御賛同を得て昨秋10月20日から当館が開催しました「東洋のガラス工芸名品展——西方からもたらされた文明の光」は予想外の好評を得て、11月28日に無事に終了いたしました。

ガラス工芸研究会は日本全国のガラス研究家、コレクター、趣味人を集めての会で、発足して丸一年ですが、既に会誌「GLASS」の第二号を発行しています。同会の第一回総会は一昨年東京国立博物館で開かれましたが、第二回総会はこの展覧会期間中10月31日に当館で開催されました。

このガラス展においては、同研





究会所属の研究家から作品の所在について御教示を受け、コレクターからは出陳について温い御協力を得ることができました。そこで、日本全国に散在する東洋のガラス名品に当館の所蔵品をも合わせ、実に150点程の作品を50余ケ所から拝借しての陳列となりました。展示場では、いずれも名品の名に劣らぬ美器揃いでありましたが、古代部門ではエジプトのモザイク・ガラスやローマのミルフィオリ（万華ガラス）碗、銀化して神秘の光を放つシリアの花弁文切子碗などにファンの目が引きつけられていたようです。また、近世では清時代のミニチュア容器である鼻煙壷の多彩な色模様、それと好対照な江戸時代の白色透明ガラスによる切子雛飾り小道具がその愛らしさと珍しさで評判となっておりました。

近畿では初めてのガラス展とあり、団体を連ねて繰り込むのも珍しくはなく、研究熱心な作家や学生の方々、ガラス作品に熱烈な趣味をお持ちの御婦人やコレクターの方々等、お客様も多種多様、熱心な質問や問合わせもいつになく多い展覧会でした。折りしも奈良の国立博物館では華々しく正倉院展を開催中でありましたが、「正倉院展も良いがこのガラス展も素晴しい」と溜息まじりに感想をもらす方もあり、“好評”との判断はまんざら当館だけの独断ではなかったようです。展覧会後も図録の購入を申し出る人が後を絶ちませんでしたが、残念なことに展示期間中に全て売り尽しました。

この期間中、二度に渡り講演会を催しました。10月31日、佐藤潤四郎氏の“ガラス加工の問題点”、11月14日、吉田光邦氏の“ガラスと文化”でした。両氏の講演の様子を写真でご覧下さい。（左頁写真佐藤氏—右—と吉田氏—左—）

ガラス展会場風景

季刊 美のたより No.38
昭和52年1月20日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.